

トンデモネズミ大活躍

ポール・ギャリコ作 矢川澄子訳



岩波書店

933 トンデモネズミ大活躍

ポール・ギャリコ作

矢川澄子訳

岩波書店 1970

320 p. 21 cm

(岩波ものがたりの本 110)

小学3,4年以上

Paull Gallico: Manxmouse, 1968

岩波ものがたりの本 110

トンデモネズミ大活躍

定価一七〇〇円

一九七〇年七月二〇日 第一刷発行 ©

一九八一年十二月一日 第一〇刷発行

訳者 矢川澄子^{やがわすみこ}

発行者 緑川 亨

発行所 101 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

株式会社岩波書店

電話〇三―二六五―四二一 振替東京六―二六四〇

本文印刷 大日本法令印刷株式会社

製本 株式会社松岳社

箱・表紙・見返印刷 錦印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

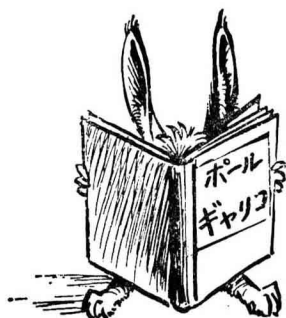
Printed in Japan

トンデモネズミ大活躍

ポール・ギャリコ作 矢川澄子訳



岩波書店



MANXMOUSE

by Paul Gallico

Illustrated by Janet and Anne Grahame-Johnstone

Original English edition published
by William Heinemann Ltd., 1968.

Text: © Paul Gallico, 1968
© Mathemata Anstalt, 1968
Illustrations : © William Heinemann Ltd., 1968

This book is published in Japan by arrangement
with Mrs. Virginia Gallico through Hughes Massie
Ltd., London and Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo.



も
く
じ



第一話 ちっちゃなネズミをつくった

陶芸職人のこと…………… 11

第二話 トンデモネズミ、ドロロンと

でくわすこと…………… 32

第三話 ヤナトコ町のできごと…………… 48

第四話 キャプテン・ホークにのって

空をとぶこと…………… 62

第五話 ヘナチヨンりようけんぶたい獵犬部隊

ネズミ狩りのこと…………… 81

第六話 ノイローゼのノウの

ネリイのこと…………… 107

第七話 ウエンディ・H・トロイと

めぐりあうこと…………… 136

第八話	いくじなしのトラのこと……………	161
第九話	いかさま動物商 ペッテン氏のこと……………	192
第十話	天下一品 トンデモネズミ 大競売のこと……………	220
第十一話	トンデモネズミ、トンデモ ネズミに對面すること……………	244
第十二話	トンデモネズミ、トンデモ ネコに對面すること……………	266
訳者のことば……………		315

トンデモネズミ大活躍だいかつやく

矢川澄子やがわ すみこ ポール・ギャリコポール・ギャリコ 訳作やくさく

第一話

ちっちゃなネズミをつくった

陶芸職人のこと

イギリスはどまん中のタニゾコドンの村に、あるときひとりのたいそう年とった陶芸職人が住んでいました。陶芸というのは、せとものでもってタイルとか、おさらとか、色つきの小さな人形などをつくる細工のことです。

この職人はちよつとかわったひとでした。というのは、このひとのつくるものはいえ、いつでもネズミときまっていたのです。村にはほかにみく人かの陶芸家がい、時によつてトリとか犬とか、ネコとかウサギとか、さまざまな種類の動物をつくるのでしたが、この職人だけはいつだって、まるでほんものそっくりの、かわいらしい、小さなネズミの陶人形ばかり、朝から晩までせつせとこしらえてづけていました。



日がな一日、きような指さきでもって、一びき、また一びきとつぎつぎにネズミのかたちをつくりあげながら、ふんふん鼻歌をうたっていればそれでよいという、まことにしあわせなおひとでした。こうしてつくって、かわかしておいたものを、夜ともなれば特別製のやき窯にならべ、朝までかけてゆっくりとやきあげます。そしてあくる日、やきあがったところを窯からとりだして、みがきをかけ、さらさらしたところをやすりでけずりととり、ひとしきりほればれとながめます。そのあげくに、ようやくネズミたちは、タニゾドンの老人の仕事場の窓口にござられるか、ロンドンへむけて送られるかすることになるのです。

ネズミのこと、ネズミの習性というものについてなら、この職人はもしかすると、世界じゅうのだれよりいちばんくわしかったかもしれません。ものの考えかただって、自分自身、ほんもののネズミの気もちになつて考えられるほどだったのです。

どうしてそんなにくわしく、ネズミのことを知りつくすようになったかといいますと、この職人の仕事場に、たくさんネズミがいてくれたからなのです。もちろんそれも、かごにかわれているわけではなくって、羽目板のうしろや床の下に、家族ぐるみで住みついていたのです。

このネズミたちは、職人とはすっかりおなじみになっていました。職人はネコなんかかつていませんでしたから、ネズミたちは、このひとが部屋にいたって、へいきで巣からあらわれ、えさをあさりに部屋をかけまわったり、よりあつまっておしゃべりしたりしていました。職人

には、ネズミたちのはなしていることがちゃんとわかったような気のすることさえありました。こんなふうにして、職人^{しよくじん}は、ネズミたちを心からかわいいと思うようになり、ありとあらゆるばあいのすがたを生きうつしにとらえたのです。できあがったネズミたちは、職人^{しよくじん}の目にうつったすがたそっくりそのまま、色も茶色^{ちやいろ}だったり灰色^{はいいろ}だったり白だったりしていました。ただ耳だけはどれもほんのりしたのもも色で、ほとんどすぎとおりそうな色あいでした。

けれども、こんなにネズミずきで、ネズミのことをよく知ってしまったのが、かえっていけませんでした。職人^{しよくじん}は、いままで一度^{ひと}も、じぶんのつくったネズミをこれでよいと思ったことがなかったのです。つくるたびに何か、ちょっとしたからなのかっこうとか、顔^{かお}の表情^{ひようじよう}とか、どこかしらにきつととらえそになったものがあるような気がしてならないのです。そうです、このひとつのつくネズミは、たしかに不安^{ふあん}な表情^{ひようじよう}をたたえていることはたたえていました。ネズミというものはと



ても感じやすくって、ネコが家にいないときだって、けっしてほんとうにのんびりしきってはいないことを、この職人はよくこころえていたからです。ネズミたちをおびやかすものは、ネコのほかにだって、たとえばテリヤとか猛禽とか、いっぱいいます。テンとかイタチとかキツネなどは、いうまでもありません。そのうえ、人間たちのしかけたネズミとりがありますし、また家族や自分自身のえさを手にいれるために、朝晩かけずりまわらなければならぬのです。ですから、この老職人のつくるネズミは、どれだって、どこかしらおちつかないふうをして、肩ごしにうしろのけはいをうかがっているように見えました。それなのに、職人の感じでは、これではまだまだほんとうのネズミらしさというものを、とらえつくしているとは思えなかったのです。仕事にとりかかるたびに、職人は、よし、こんどこそはもうしぶんのない完全なネズミ、ネズミのなかのネズミをつくりたいものだ、思わないこととはなかったのですけれど。

こうして月日はながれました。人びとはあちこちからやってきて、職人のつくったネズミを買っていきます。これこそ非のうちどころのないネズミだと思っていたからです。けれどもご本人の陶芸職人は、このぶんではひょっとすると、百パーセントもうしぶんのないまんぞくなネズミをつくりあげることができないうちに、こちらの寿命がさきにおしまいになってしまいかもしれないと、そろそろ気をもみはじめていたのです。



と、そこへある日とつぜん、ちょっとかわったことがおこりました。だれでも何か、いのちがけのぞみをいだいて、はげしくはたいたい、けんめいにつとめたりしていると、ふしぎにぱっと目のまえがひらけて、あらゆることがわりでなく思われてくるようなことがよくあるものです。この職人のばあい^{しよくだん}が、まさにそのとおりだった、というわけにはいきません。おか

しなことに、そんな感じにおそわれた日というのは、ちやうどこのひとがなにも仕事^{しごと}をしないつもりにしていた日だったのです。つまりその日は、タニゾコ^{やうじん}の村の友人のむすめの、だいじなお嫁入りの日にあたっていて、老職人^{らうしよくだん}もちろん、招かれていたのです。

もうすまでもなく、それはまる一日がかりのまことにおめでたい、にぎやかなお祝いになりました。まず朝の結婚式^{けつこんしき}にはじまって、つぎには大がかりな披露宴^{ひろうえん}があり、花よめ花むこの健康^{けんこう}をいわって、何^{なん}回^{かい}となく乾杯^{かんぱい}がくりかえされました。新郎新婦^{しんあうしんぷ}がひきとつても、家路^{いえじ}につくにはまだまだ早すぎました

1 ちっちゃなネズミをつくった陶芸職人のこと